

《24期生用》

外国語学部 演習Ⅰ 紹介

SEINAN
GAKUIN UNIVERSITY

発行日：2021年6月20日

目次

開講科目

ジャン＝リュック アズラ： フランス語学 言語とは何か	5
C.L. ドーハティ： 言語文化学 「オリエンタリズム」と「カウンター・オリエンタリズム」：美術作品と広告、映画で学ぶ	6
藤本滋之： 英語学 ことばを科学する	7
リチャード ホドソン：英語圏文学・文化 Shakespeare's <i>Macbeth</i> on page, stage, and screen	8
金子幸男：英語圏文学・文化 『クララとお日さま』(<i>Klara and the Sun</i>)を読む—AIロボットとイングリッシュネス	9
加藤洋介：英語圏文学・文化 イギリス帝国の歴史と英語圏文学	10
清宮徹：コミュニケーション学 社会と組織におけるコミュニケーション問題を考える(視座と方法)	11
眞下弘子：フランス語圏文学・文化 “Je joue la comédie” — フランス舞台芸術研究	12
宮原哲：コミュニケーション学 Interpersonal Communication 研究 —「コミュニケーション力」が何を指すのか知って、実践的能力を身につけよう!	13
三宅敦子：英語圏文学・文化 ヴィクトリア朝イギリス小説研究の諸相(実施言語：日本語)	14
宮本敬子：英語圏文学・文化 Black Lives Matter 運動から見るアメリカ文学と映画	15

目次

開講科目

中西弘: 英語学 英語音声の仕組みと習得メカニズム	16
ドウエン オルソン: コミュニケーション学 レトリックとパブリックアドレス (Rhetoric and Public Address)	17
フランク E. オスターハウス: 英語圏文学・文化 Kurt Vonnegut: Irony in Motion	18
武末祐子: フランス語圏文学・文化 「美と美術と美意識を語る」	19
ティエリー トリュベール: フランス語学 映画・絵画・写真を通して見た食文化	20
山田智久: 日本語教育学 学びを社会に届けよう	21
横溝紳一郎: 日本語教育学 外国語(日本語・英語・フランス語)教師のすべきこと・できること・やってはいけないことについて考えていこう!	22
和田光昌: フランス語圏文学・文化 « Amour et Argent » — 近代フランス文学における「恋愛と金銭」	23
ユスチナ W. カシヤ: グローバル文学・文化 Translation Practice / 翻訳練習	24
前田雅子: 英語学 統語論基礎	25

目次

開講科目

山元里美: 社会学 26
ダイバーシティ社会について考えてみよう

カタリナ バークレー: コミュニケーション学 27
Exploring International Corporate Communication

閉講科目

藤野功一: 英語圏文学・文化 28
アメリカの反知性主義と人種問題

一谷智子: 英語圏文学・文化 29
エコリティシズム—環境危機と文学的想像力

伊藤彰浩: 英語学 30
外国語の学習・習得を科学する

河原真也: 英語圏文学・文化 31
アイルランドとはどのような国か？

北垣徹: 社会学 32
グローバル・フード・スタディーズ

杉山香織: フランス語学 33
コーパスに基づく言語研究

石田由希: 英語圏文学・文化 34
映像芸術を読む

言語とは何か

専門分野

フランス語学(フランス語史)、日仏比較社会学、言語学、言語教育学、社会学

専門分野の概要

まず、言語学では、言語の歴史、言語が時間とともにどのように変化するかについて研究しています。古い言語(古フランス語、古英語、ラテン語など)と現代の言語の関係を扱っています。特に、フランス語の母音の歴史的変化、ラテン語からの古フランス語の発展、メディアに表れるフランス語の近年の変化について研究しています。

次に、言語教育学では、日本における外国語教育とフランス語教育の教授法について研究しています。外国語学習と認識(言語やコミュニケーションをどのように捉えているか)の関係、それはどのように変化するのかに興味を持っています。

演習内容

本演習の専門分野は言語学です。目的は、人間の言語についてより正確に理解し、その解像度を上げることです。そのために、「言語」を構成する主要要素の定義について学んでいきます。一般に言語について考えられていることと、言語学的(科学的)な説明との間には違いがあります。例えば、外来語と外国語のちがい、地域方言と社会方言のちがい、方言と標準語の関係、公用語と共通語のちがい、文字と言語の関係、言語の変化と社会の関係、規範意識(何が「正しい」のか)と言語の実態の関係などです。演習では、以下のテーマを扱います。

- 言語とは何か
- コード
- 正書法(書き方)
- 文字や記号で言語を表す方法
- コーパスとインターネットによる言語の研究方法
- 言語に対する2つのアプローチ: 規範文法と記述文法
- 方言、標準語、公用語など
- アクセントと訛り
- 音声学と音韻論
- 文法と形態論
- 地域方言と社会方言、個人方言
- 新語・言語の変化
- ピジンとクレオール
- 言語政策
- 英語史・フランス語史

教材は、担当教員が提供する資料です。言語の例として、主に、英語・フランス語・日本語を取り上げます。

ゼミでの使用言語は、基本的に日本語ですが、学生の能力と研究テーマに合わせて、英語またはフランス語も使用します。発表、レポートの言語も同様です。

Cynthia Daugherty

C. L. ドーハティ

「オリエンタリズム」と「カウンター・オリエンタリズム」: 美術作品と広告、映画で学ぶ

専門分野

言語文化学(文化交流史)英語教育学

Comparative culture, History of English education

専門分野の概要

I am interested in the history of exchanges between Japan and western countries. As such, I have researched Rimpa art and its evaluation by westerners, orientalism, and the history of English education in Japan. Concerning the latter, I am particularly interested in American and British teachers who have been employed in Japan as English teachers. Currently, I am studying an American woman named Elizabeth Vining who was in Japan from 1946-1950 as the tutor to Crown Prince Akihito (Heisei emperor).

演習内容

In my seminar, we focus on orientalism as it relates to Japan. orientalism is the term to explain the general stereotypes that Western countries have made about Asian countries. By studying the history of orientalism through the example of Japan, students will gain a framework for understanding other cultures, as well as confidence in identifying human bias when people encounter other cultures. They will also gain a deeper understanding of the history of Japanese and Western exchange.

本ゼミでは、「オリエンタリズム」を日本文化との関連において考察する。オリエンタリズムとは、西洋諸国が古代よりアジア諸国に対して持つステレオタイプを説明する用語である。オリエンタリズムは自文化以外の文化を他者として扱う一つの例であり、自分の文化以外の文化を特異なもの、劣ったものとして定義する一つの例である。

ゼミの前半は、西洋諸国が日本に対して持つステレオタイプが、明治時代から現在までいかに変化していったか、或いは、いくつかの例においては不変であったかを検証する。オリエンタリズムのステレオタイプには、アジアの人々と文化は感情的で、合理性に欠き、子供っぽく、謎めいていてミステリアスといった考え方が含まれるが、本ゼミでは、その実際の例を、美術作品や広告、映画の中で発見していく。授業ではまず、講師が示した例と映像について議論と分析を行い、次に、受講者が自ら広告や映画を調べて発表を行う。授業で扱う映画については、ゼミのメンバーで話し合っただけで決める予定である。

ゼミの後半は日本における「カウンター・オリエンタリズム」について学ぶ。「カウンター・オリエンタリズム」とは、西洋で作られた日本に対するステレオタイプを、日本がいかにしてその「強み・メリット」へと転換したかを考える学問である。授業は、主に広告や映画からの例を取り扱うが、ここでも講師が例を示し、それを基に受講生は広告と映画の分析を行い、発表する。

日本文化に対するオリエンタリズムの歴史を学ぶことは、他の文化を理解する枠組みを体得することになり、また、異文化に遭遇した時に人々が持つ偏見を見分ける力にも繋がる。更に、ゼミでの課題を通して、ゼミ生たちは批判的思考力と知的自立力を鍛えることになる。

ことばを科学する

専門分野

英語学(統語論)、日本語学、理論言語学

専門分野の概要

ことばの意味と形の研究をしています。「導入演習」と「英語学概論A」の授業では、英語と日本語を比較しながら、ことばの音、意味、構造の特性・規則性を話題にしていますが、そのうち特に「英文法」の授業で論じているような文の意味と形の研究をしています。英語でも日本語でも、同じような内容を言うのに複数の表現法があるのが普通ですが、どのように違い、したがってどのように使い分けたらよいのか、なぜその語順で話さなければならないのか、それ以外の語順ではだめなのか、といったことを研究しています。さらに(複数の文から成る)文章の構成も研究しています。英語・フランス語と日本語では論理的な文章の構造が違います。議論展開のわかり易さの違いはどこから生まれるのか、いつも試行錯誤しながら読み書いています。

演習内容

私たちの身の回りで生じるいろいろな現象には、目で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、舌で味わい、手で触れることができる観察可能な部分と、直接見えたり聞こえたりはしていないけれども、観察可能な部分を手がかりに調べてみて初めて存在を想定できる部分があります。リンゴは上から下に落ちるのを観察できますが、Newtonのおかげでリンゴを引っ張る力が働いているのだとわかります。また、同じNewtonのおかげで虹には7色あるのだと日本人は信じています。実際には4色くらいしか見えないのに。観察可能な部分を手がかりとして観察不可能な部分を明らかにすることを科学と言いますが言語学もその一つです。ことばという、人間という種に特有の日常最も身近なものの、見える部分、聞こえる部分を手がかりに、見えない部分、聞こえない部分を探究します。

「演習Ⅰ」では、「英語学概論A」や「英文法」の授業で話題にしたような、言語の音、意味、構造について、各自がそれぞれ興味をもったトピックを選びさらに深く追究します。各トピックについて、過去になされてきた研究をレポートし、その内容についてディスカッションするという形式で授業を進めます。それぞれが自由に選んだ異なるトピックでも、ことばに関するものである限り、関係する他の例を思いついたり、異なる考え方の可能性を指摘したり、議論は展開できるものです。このような勉強を進めることで、科学としてのことばの研究方法を学び、人によってはさらに「演習Ⅱ」を履修し独自の研究を目指すこととなります。論理的な思考力とそれを表現する力も鍛えられます。

Richard Hodson

リチャード ホドソン

2022年度開講

志望書の内容は
英語で作成すること

Shakespeare's *Macbeth* on page, stage, and screen

専門分野

英語圏文学・文化(イギリス文学)、英語教育学
English Literature, English Language Teaching

専門分野の概要

My teaching and research focus on two main areas: English literature and the teaching of English as a foreign language.

During my undergraduate and graduate school studies, my main research interest was in English literature, particularly the drama of the Renaissance period: the age of Shakespeare, and the dramatists who came after him. I wrote my PhD thesis on English comedies written in the 1630s and early 1640s. Recently, my research has focused on contemporary English fiction: in particular, the novels of Kazuo Ishiguro and Hilary Mantel.

Since coming to Japan as a teacher of English language, I have also become interested in the field of humor studies: in particular, the practice of humor competence training. Research in this area focuses on how language teachers can use methods and materials to help learners of English become “humor competent” (which means, be able to recognize, understand, and produce humor) in English.

演習内容

In this seminar, we will read and discuss William Shakespeare's famous and popular tragedy *Macbeth* (1606). It is one of Shakespeare's shortest plays but also one of his most accessible and enjoyable works, with an atmospheric setting and a thrilling plot; full of beautiful and sometimes challenging language; and the source of a surprising number of famous quotations.

In class, we will read *Macbeth* together in English, although of course you can refer to a Japanese translation as well if you like. We will also watch several stage and movie adaptations of *Macbeth*, including a modernized TV adaptation of the story and a famous film that moves the action of the play from medieval Scotland to feudal Japan. Perhaps most importantly, because the best way to understand and enjoy drama is to act in it, we will adapt, practice, and perform scenes from the play ourselves, in class. This is not an acting class, but a willingness to perform in front of others and to make decisions as a director is one of the key requirements for taking part in and succeeding in this seminar.

Students in this seminar will make regular group presentations to summarize the plot, themes, and techniques of *Macbeth* and guide class discussion of the play. You will be expected to review what we have studied regularly, through weekly in-class or Moodle mini-quizzes. You will also make a research presentation on a related area, and write a final report. These activities will help you to begin preparing for individual research, presentations, and graduation theses the following year.

The seminar, including tests, presentations, and reports, will be conducted in English and will provide many challenging opportunities for students who want to improve their English reading, writing, speaking, as well as their presentation, critical thinking, and performance skills.

かねこゆきお 金子幸男

『クララとお日さま』(Klara and the Sun)を読むーAIロボットとイングリッシュネス

専門分野

英語圏文学・文化(イギリス・文化・社会)、19世紀～20世紀初頭イギリス文学・文化・絵画、特にイングランドの田舎／田園の研究、イングリッシュネス、ブリティッシュネス

専門分野の概要

ブリテン(イギリス)はイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドから成る連合王国ですが、昨今、歴史的なEU離脱を達成し、今後の成り行きが注目されます。私の研究分野は、「イングリッシュネス」といって、「イングランド的なもの」、「イングランドらしさ」、「イングランドのアイデンティティ」です。研究対象としてはイングリッシュネスの本質と言われる田園／田舎の研究、特にカントリーハウス(貴族のお屋敷)やコテージ(農民の家)、村(人)が、小説、詩、劇、風俗画、風景画の中でどのように描かれているかをホームという概念を用いて研究しています。時代的には19世紀初頭から、ヴィクトリア女王の時代(1837年～1901年)を経て第一次大戦の前まで(1914年)が中心ですが、20世紀から現代に至るまで関心を持っています。

演習内容

著者のカズオ・イシグロは長崎生まれの日系イギリス人小説家で、5歳のときに渡英しそのまま帰化したのが、数年前にノーベル文学賞を受賞した。この小説は2021年に出版されたばかりの彼の最新作で、物語は人工知能AIロボットのクララとその友人で病弱のジョージーとの交流を描いたものである。近未来の子供たちはオンライン授業が主流でコミュニケーション不足なので、話し相手となるべくクララは開発された。クララは「親友」(AF)と呼ばれ高い認知能力と旺盛な学習意欲をもつ。クララの役目は、ジョージーの孤独感を癒し幸福にすることである。クララは周りの世界を認知し記憶、分析する。ロボットに機能差や個性があるように人間社会にも階級差があること、子供に「向上処置を受けた」子とそうでない子がいることなど、格差社会の存在を認識する。また都会と田園／田舎という二つの対照的な舞台も興味深い。AFは太陽光で動くロボットなので太陽を神様のように崇める。

読者(皆さん方)は、作者が人間とは異なる異質な他者であるはずのAIロボットを、イングリッシュネスの中にどう位置付けているのか。都市ではなく田舎／田園にこそイングランド的なものがあるという考え方をこの小説は提示しているのかどうか。さらには科学と人間の関係はどうなのかを考えさせられる。イシグロはコロナ・ウィルス対応を通じて科学の重要性を再認識したとインタビューで言っている。

<授業のやり方>

授業は、毎週、担当者に担当箇所のあるすじ、用語解説、コメントをつけたレジュメを作成してもらい、それをもとに議論を行う。重要箇所は精読する。英語は平易ながらバランスのとれた格調の高い英語である。長さは300頁。1年で読みきります。

イギリス帝国の歴史と英語圏文学

専門分野

英語圏文学・文化(コモンウェルス文学)、英語教育学、英語圏現代文学、英語圏文化史、翻訳研究

専門分野の概要

四半世紀になろうという研究の出発点はイギリスのモダニズム文学の研究。T. S. エリオットの思想と文学の研究にはじまり、その後、時代と地域を拡大し、いまでは英語圏の文学と文化を幅広く扱う。産業革命を経て巨大な帝国に発展したイギリスは、政治、経済、文化、教育のさまざまな領域で植民地とヒト、モノ、情報の流れを制度化し、その過程で豊かな文化を形成した。この文化史の研究を通してグローバル・ヒストリーを読み解くことに関心がある。他方で翻訳家としても長く活動し、アカデミックな(つまりあまり売れない)書物の翻訳の仕事をつづけている。文化史は翻訳の歴史でもあるととらえ、それを学生に伝え、あっと驚かせることに喜びを見出す。驚きは知の原動力になると考える。次のURLでインタビュー記事を見ることができる。<http://interviews.cengage.jp/>

演習内容

世界地図を見ながら歴史を説明できるようになる。これは、この演習の最初に示される目標である。大航海時代以後にヨーロッパ諸国はアフリカやアジアに進出し、新しいヒト、モノ、情報の流れを形成した。なかでもイギリスは産業革命を経て強大な国家になり、多数の植民地を獲得し、広大な英語文化圏を築いた。イギリス帝国史の研究を通してグローバル・ヒストリーを読み解くことができる。たとえばイギリス帝国の発展にのみ込まれたインドで、イギリスや日本はどう見えたか。そこで英語教育はどう発展したか。英語文化圏のそれぞれの地域を中心として世界地図を見つめ直すと、グローバル化と言われる歴史の動きがけっして単純な進歩史観に収まらないことが理解できる。この複雑な動きをとらえるテキストとして、演習では文学テキストを主にとり上げる。テキストの背後に奥行があり、テキストを通して歴史や文化の奥行をとらえ、同時に歴史や文化のコンテキストから文学テキストを分析する。世界地図を回し、想像力を駆使し、歴史を読むことで、多角的な世界観を形成する。

この演習で、情報の編集をとくに重視する。文章の推敲についてわかりやすく解説し、レポート課題の添削を通し、文章作成の方法と技術を丁寧に教える。名文を書くためには、名文とはなにかを知らなければならない。それを解説し、論じ、その意義を伝える。周知の通り、インターネットには感情的な悪文があふれている。文章の推敲を通して、論理的、理性的な文章を書く意識を高め、洗練された書き手になるよう指導する。

社会と組織におけるコミュニケーション問題を考える(視座と方法)

専門分野

コミュニケーション学(組織)、不祥事と危機管理、組織のダイバーシティとジェンダー、クリティカル・マネジメント研究

専門分野の概要

私の研究の焦点は、組織の内部や組織に関わる問題が、どのようにコミュニケーションを通じて現実化するかにあります。特にポスト構造主義の視座からディスコース(言説)に着目し、組織の当たり前を疑い、日常に潜む問題を分析します。ディスコースを社会科学方法論の質的研究の中心に据える試みを展開、2019年に、『組織のディスコースとコミュニケーション』を出版、日本コミュニケーション学会賞を受賞。現在の研究関心は、不祥事および危機の社会的構成、企業のヘゲモニー、被災地のレジリエンス、組織のアイデンティティとパワー。特に近年、組織のジェンダー不平等を構築し続ける「ジェンダー化」のコミュニケーションと社会関係の「交差性」について研究プロジェクトを展開。経営・組織における新たなアジェンダを模索します。

演習内容

このゼミでは、企業や病院、学校、NPOといった組織におけるコミュニケーションを学びます。そこで演習Iでは、次の2つの目的を設定します。1) 実社会でも活かせるグループのコミュニケーションの基本を習得すること。2) 社会や組織を深く観察することができ、多様で複雑な問題を分析的に理解できる洞察力を養うこと。

第1の目的のため、グループ・コミュニケーションを理論と実践を、アメリカの基本的教科書をもとに学びます。個別テーマとしては、リーダーシップ、ディスカッション、問題解決と意思決定、対立、交渉などです。実習やシュミレーションによる学習を含み、スキルの向上を図ります。コミュニケーションのスペシャリストになることを目指します。

第2の目的のために、2つの方法を取り入れます。前期は、インタビューとフォーカスグループの手法を実践し、特定のテーマについて取材します。後期は、フィールドワークを実践します。自分に身近な特定の組織を選び、そこを徹底的に観察します。そして、そのフィールドノートを作成し、レポートしてもらいます。テーマはゼミ内で意見交換し、複数のテーマを設定します。この課題は、問題の真実を見つけ出すのではなく、複雑な社会的現実がどのように作り出されるかを理解することを目指します。現実を形作る言語化のダイナミズムに注目しながら、コミュニケーションと社会的プロセスを、言説の視点から考察していきます。

グローバル化とネオリベリズムが進展する中、現代社会はより複雑なコミュニケーション問題が目に見えて起きています。これらを他人事とするのではなく、自分のこととして問題解決に臨む姿勢を育てたいと思います。

***なお、応募者多数の時は、選別を行います。そのために所定の申込用紙を配布しますので、応募を決めた人は、清宮までメールしてください。**

“Je joue la comédie” — フランス舞台芸術研究

専門分野

フランス語圏文学・文化(フランス文学・演劇)

専門分野の概要

フランス語をベースにして舞台芸術—オペラ、バレエ、ダンス、ミュージカル、演劇など—を対象に視覚・身体表象の研究と、フランス17世紀文学、特にジャン・ラシーヌ演劇の研究をしています。ヴィジュアル空間と身体に跨る文化事象としてモード研究も視野に入れて授業学習に取り入れています。舞台芸術が「見る/見られる」という視線の相互的な行為によって成り立つ場であることを踏まえ、この行為 (action) を主題化する装置として身体がどのように機能しているのかを、実際の舞台の「セノグラフィー」(scénographie舞台空間演出)において明らかにすることが目的です。また、パリ・ソルボンヌ大学の所属機関「17・18世紀フランス語・フランス文学研究センター」(CELLF 17^e-18^e)の海外研究員として、フランス17世紀における文学と哲学・神学思想との関係をテーマとした共同研究に従事しています。

演習内容

この演習では、演劇・バレエ・オペラ・ミュージカル・ダンスなど舞台芸術を対象に研究を行います。「セノグラフィー」をキーコンセプトとして、パフォーマンスアートにおける空間や身体、言葉の関わりを scéniqueにとらえる試みです。

Scénique「セニック」に、というのは空間の劇的な作用を見る、ということです。例えば、誰もが知っているミュージカル『レ・ミゼラブル』の舞台に出現する学生たちが築くバリケード。ここには、空間をどうやって力のベクトルのぶつかり合う場にするかという発想があって、パリという都市の空間が、時間が濃密に取り込まれた演劇的な場所として浮かび上がります。そもそも原作のヴィクトル・ユゴーの小説が、パリの地下下水道というバロック的なものを底に秘めながら構築された小説だということは重要です。ユゴーが「怪物の腸」と呼ぶパリの下水道の迷路を、ジャン・ヴァルジャンはジャヴェルに追われながら逃げまどい、追う者と追われる者の間で都市は空間化されていくのです。ユゴーがジャン・ヴァルジャンにパリのアンダーワールドを一人で踏破させたように、このミュージカルの舞台は、個人に都市と拮抗し得る力を夢見る点において、1832年の反乱によって描き出されるパリの壮大なセノグラフィーとなっているのです。

前期は『レ・ミゼラブル』や『ノートルダム・ド・パリ』などいくつかの作品にフォーカスし、視線の側と言葉の側から考察を行い、舞台のまなざしのなかで言葉が具体性や身体性をどのように獲得するのかを見ていきます。19世紀フランスで独自に発展した『カルメン』などの「グランド・オペラ」にも注目して、舞台がどのようにして日常から離れた異空間として現在という時間の上に成立するのか、そのプロセスを観察して舞台芸術研究のアプローチの仕方を学び、各自研究対象のジャンルやテーマを決定していきます。後期は選択したテーマのもとに研究発表を行い、ゼミ論を書きあげていきます。

Interpersonal Communication 研究 —「コミュニケーション力」が何を指すのか知って、実践的能力を身につけよう！

専門分野

コミュニケーション学(対人・医療)

Interpersonal Communication, Cross-Cultural Studies of Inter Health/Medical Communication

personal Communication,

専門分野の概要

コミュニケーション学は広大な領域で、二人の間の関係から国同士やメディアを通して不特定多数の人が関わる「規模」の違いや、家族・友人・教師と生徒・医師と患者など「関係」によって区別されます。その中で最も基本的な二人の人間の「対人コミュニケーション」が私の専門です。欧米産の研究が、日本の人間関係に適用できるのか、できなければ日本特有の要素をどう取り入れるべきか、という疑問に答を出す努力をしています。

演習内容

This seminar will be conducted bi-lingually (English & Japanese). Some concepts, theories, research in communication studies can be better explained and understood in English than in Japanese, and vice versa. Students interested in pursuing academic and professional goals in the globalized and globalizing world should be equipped with knowledge and skills to function in more than one language. Specifically this seminar will help you reach the following goals:

- A. Acquire knowledge in fundamental aspects of human communication, and account for basic concepts of interpersonal communication across social situations;
- B. Present and argue both orally and in writing your ideas concerning social issues that revolve around interpersonal communication, and
- C. Understand that communication is a problem-solving process, and obtain skills that will help identify and solve social problems.

「コミュニケーション能力」は単に「話し上手」や、「空気を読む」ことと思われがちですが、その根底に流れるのは人間だけができる「シンボル活動」(symbolic behavior)であることを理解する必要があります。この演習では、さまざまな社会事象に目を向け、問題意識(「なんか変！」=feeling of difficulty)に始まる問題解決能力の習得と実践を目指します。基本的な知識を習得し、実践的なコミュニケーション能力を身につけることが目標です。講義、ディスカッション、プレゼンテーションはもとより、「問題」に関する情報を収集するためのインタビュー、観察などを通して、さまざまな状況(context)での人間関係を学ぶ演習を展開します。

ヴィクトリア朝イギリス小説研究の諸相

専門分野

英語圏文学・文化(イギリス文学・文化・Victorian Studies)

専門分野の概要

私はイギリス19世紀における文学(特に小説)を文化的文脈において研究しています。イギリス文学という学問分野において19世紀は、小説という文学形式が大きく発展した時期です。イギリスで小説が誕生した当初、小説は表向き知識や道徳を学ぶ方法、読み書きが出来るようになった大衆を道徳的に教育する方法と考えられていました。とはいえ実際には下層の人々は道徳的ではないと非難されるような読み物を好むなど社会階級により関心が異なり、さまざまなジャンルの小説が発達していきます。その後19世紀末に文学を芸術とみなす新しい運動が始まり、皆さんに馴染みのある今の小説に近い形へと発展します。研究テーマとしては、これまで小説における室内装飾文化の表象を研究していましたが、最近は見世物文化などの当時の大衆娯楽が小説に及ぼした影響を研究しています。

演習内容

この演習タイトルにある「ヴィクトリア朝」とはヴィクトリア女王の即位期間(1837-1901)を指します。この演習は以下の二種類の授業タイプに分かれています。

(1)ヴィクトリア朝に出版された小説に関する先行研究について書かれた概説論文集(以下のテキスト)を読み、ヴィクトリア朝イギリス小説研究に必要な基礎知識を学ぶ授業。このタイプの授業回では下記のテキストを輪読し、ヴィクトリア朝小説研究に必要な視点や研究方法を学びます。

テキスト名:Deirdre David編著 *The Cambridge Companion to the Victorian Novel*, Second Edition. (Cambridge, 2012)
テキストは大学院修士課程での使用にも耐えるレベルなのでやや難。ただしこれ一冊で、小説を対象としたVictorian Studiesの学問的内容を概観することが出来ます。

(2)ヴィクトリア朝イギリス小説の古典ともいえる小説を日本語訳で読む読書会タイプの授業。このタイプの授業回では、18世紀イギリスに誕生した小説という文学形式がいかに発展したかを実際の読書体験を通して学びます。下記の小説を取り上げます。

ジェイン・オースティン『自負と偏見』、チャールズ・ディケンズ『クリスマス・キャロル』、シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』、ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』、トーマス・ハーディ『ダーバーヴィル家のテス』。

(1)と(2)の異なるタイプの授業を取り混ぜて受講することで、最終的に一人で小説の分析が出来るようになることを目指します。この授業でヴィクトリア朝小説研究に関心を持った方は、演習Ⅱで自分が研究したい作家・小説についてさらに学修を深めることが出来ます。授業で読む文献の読書量は全体として多めです。せっかく大学に入ったのだから、たくさん学びたいという方は大歓迎です。

みやもとけいこ 宮本敬子

Black Lives Matter運動から見るアメリカ文学と映画

専門分野

英語圏文学・文化(アメリカ文学・映画・視覚芸術)

アメリカ文学・文化、映画・絵画などの視覚表象研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究

専門分野の概要

19世紀半ばから現代までを中心に、アメリカ文学（とくにアフリカ系アメリカ文学や女性作家）、映画・絵画などの視覚表象と文学との比較研究、そして文学や芸術を分析する視点としてジェンダー・セクシュアリティ研究などを行っています。大学3年生のときに交換留学生として1年間アメリカで過ごした経験から、移民国家アメリカの文学や芸術に興味を持つようになり、その後ニューヨーク州立大学大学院で比較文学を学び博士号を取得しました。文学研究は、英語力、論理的思考力、知識、教養という点で皆さんを成長させてくれるだけでなく、芸術作品として皆さんの心を癒し、魂を育み、人生に希望を与えてくれます。学生の皆さんには、これからますます多様性が重んじられる社会において、「他者の物語」に開かれた自分自身の物語を紡ぐ力をつけてほしいです。

演習内容

近年、ブラック・ライヴズ・マター (BLM) 運動への連帯と共感が世界的な広がりを見せていますが、運動を立ち上げたのが3人のアメリカ黒人女性であったことは偶然ではありません。BLM運動に思想的枠組みを与えた「インターセクショナリティ(交差性)」という概念は、しばしば批判的人種理論を専門とする法学者キンバリー・クレンショーが1990年代に波及させたとされていますが、実は黒人女性の身体と経験にまつわるものとして萌芽し、1970年代に結成されたブラック・クイア・フェミニズムのグループをその源流としています。本演習では、ブラック・フェミニズム思想とBLM運動における「インターセクショナリティ」の概念について学び、ブラック・フェミニズム運動の高まりのなかから生まれてきた黒人女性作家たちの作品を研究します。さらにはBLM運動と影響関係にある新しい作家や最近のハリウッド映画（『ハリエット』や『ブラックパンサー』）についても考察していきます。

前期は、アメリカの黒人解放運動、女性解放運動、そして監獄廃止運動の先導者であり、BLM運動の広がりとともに、今世界的に注目されている人権活動家、哲学者、教育者アンジェラ・デイヴィス (Angela Davis) の著作からの抜粋を読みます。かつてテロリストの汚名を着せられて投獄され、ジョン・レノンとオノ・ヨーコが“Angela”という曲を、ザ・ローリングストーンズが“Sweet Black Angel”という曲を作り、世界中に Free Angela運動が広がったことは有名ですが、デイヴィスが「インターセクショナリティ」概念を共同性や連帯にむけてどのように進化させているかを学びます。後期は皆さんの関心に合わせて、ブラック・フェミニズムやBLM運動と影響関係にある文学作品や映画を取り上げ、グループ発表を中心にディスカッション形式で進めていきます。

英語音声の仕組みと習得メカニズム

専門分野

英語学(音声・聴解研究)、心理言語学、英語音声学

専門分野の概要

音声言語習得分野では、こどもや第二言語学習者が言語音声をどのように知覚・理解・産出・獲得しているのか、その心的メカニズムを解明することを目標としています。

現在、私は、第二言語学習者の音声習得プロセスの一端を解明することを目標として、3つのテーマに取り組んでいます。1) 英語のプロソディー（イントネーション・ポーズなど）が、文理解時にどのように利用されるのか、その心的メカニズムにまつわる研究 2) 音声を知覚・理解する際に、話し手の目や口の動きをどのように利用するのか、その認知プロセスを明らかにするため、聞き手の視線を測定する装置（眼球運動装置）を用いた研究 3) 英語音声学習法としてよく用いられるシャドーイング遂行時の神経基盤を解明するため、脳活動測定装置（fMRI）を用いた研究を行っています。

演習内容

このゼミでは、(1) 英語音の仕組みの基本的な理解、(2) 音声知覚・理解・習得プロセスについて研究を行います。

(1) 英語音声の仕組み：1つ1つの母音や子音の調音の仕方（口や舌等の動かし方）についてMRI動画などの視覚・聴覚資料を用いて、日本語の調音動画と比較しながら理解を深めます。さらに、英語音声を音響分析することで可視化し、個々の音声に含まれる特徴的な成分について理解します。さらに、音節・リズム・イントネーションといった英語の超分節音的特徴について、日本語との比較を行います。研究テーマと成り得る題材は、日常生活に溢れています。例えば、有名人のスピーチ音響分析、言い間違えが起こりやすい音配列、音の響きと商品名/男女の名前の関係、音の響きが味覚・嗅覚等に与える影響、音符と日英歌詞の関係、日本人英語学習者の英語リズムの特徴などが挙げられます。

(2) 音声の理解・習得のメカニズム：こどもや第二言語学習者がどのように音声を知覚・理解・獲得するのか、その心理メカニズムを探ります。例を挙げると、リスニングの際、聞き手は、受動的に音声を聞いているだけでなく、脳内でその音を発音していることが様々な研究で示されています。さらに、対面で話を聞く際には、聞き手は話し手の口元の情報を利用して、脳内で発音イメージを形成しています（新生児でさえ、養育者の口元の動きを注視して、養育者の声を脳内で模倣しようとしています）。一見、音声とは無関係に見える、黙読の際にも、読み手は、脳内で文字を音声に変換（発音）し、その音声情報を理解に役立てていることが示されています。このような音の知覚・理解にまつわる心理メカニズムとそれに基づくことばの習得方法について皆さんと一緒に考えます。

レトリックとパブリックアドレス (Rhetoric and Public Address)

専門分野

コミュニケーション学(マスコミ・レトリック)、クリティカルシンキング 専門分野の概要

レトリック: 言葉として「rhetoricとは古典ギリシア語から由来します。主に説得の過程に関する学問で始まりましたが、西洋の国々の社会の中で(特に政治と法律の世界)人の前に立って演説することが常用な役割を果たしてきました。この専門では演説する方法をはじめ、ほかの人がした演説の分析方法論も研究します。今の時代(特にマスコミ技術の発展に伴って)演説だけではなく公の場でのコミュニケーション現象に目を向けることも珍しくありません。

マスコミ論: 上述に示唆したように現代は公の場のコミュニケーション現象の多くはメディア技術を通して伝わるものは少なくありません。それに当たってマスコミの社会の中の役割、技術の観点からどのようなメッセージ作成が可能であるか、その技術を利用しているからコミュニケーション現象としてどう違うかを探る必要があります。

クリティカルシンキング: これは上記の二つの専門分野を勉強するために不可欠な能力です。特にコミュニケーション現象を分析するのが中心になります。

演習内容

人間は表象(言葉や非言語メッセージ等)を使いながら相互的に影響を授受する。レトリックとは人間が多彩な表象を利用しながら意図的に回りの人間・社会に影響を与えようとする過程である。ゼミではこのようなコミュニケーションの試みを分析する。分析の対象になるものは、典型的な例としてpolitical speeches, advertising等があるが、場合によっては石碑、建物、旗等もある。これまで、ゼミ生の中で、演説・宣伝のようなものを分析した生徒が多かったが、エッフェル塔・BGM・野球チームのPR・韓国での一人デモ等の分析もあった。各自、分析対象の選択はかなり自由であるが、分析するための観点(レトリックの観点)が重要である。

上記が最終的な目標ですが、多くのゼミ生がレトリックを始めて勉強すると思いますので演説の基本から始め、過去の優秀な演説を参考にしながら優れているものはどのような特徴あるかを見つめていきます。対象になる演説は西洋なものを中心になりますがそれに限りではありません。この演説を対象にしてゼミの中で演説の歴史背景と演説そのものを一緒に分析していきます。

また、分析するためにレトリック論からくる分析法を勉強するが、ものごとに対しての接し方、考え方、理解する方法も訓練する。上述したような課題について理解するために、レトリック論とともにcritical thinkingも学習する。そのために、皆さんが関心をもっている課題—社会問題・外交問題等・政治問題等—について考慮しながら議論していく。

Frank Osterhaus フランク E・オスターハウス

2022年度開講
志望書の内容は
英語で作成すること

Kurt Vonnegut: Irony in Motion

専門分野

英語圏文学・文化(アメリカ文学・文化)

専門分野の概要

Currently my research interest is the American writer Don DeLillo, especially concerning the structure of his novel *LIBRA* (about the JFK assassination).

演習内容

This seminar will focus on the life and literature of Kurt Vonnegut. The works that we will look at most closely will be *Cat's Cradle* and, of course, *Slaughterhouse-Five*. We will also go over a few of his short stories.

Vonnegut was about your age during WWII when he decided to quit and join the Army. He was captured and held as a prisoner of war in Dresden, Germany. While he was held there in an underground cell as a prisoner, Dresden was fire-bombed. The city was burnt to the ground and many people died. Ironically, Kurt (the American enemy prisoner) survived because he was held underground. This kind of irony—both dark and light—can be found throughout his works.

The course will be conducted generally in English (especially reports); however, group-work can be conducted in either language. For the most part this course will consist of class meetings where we will present, discuss, and analyze the stories. We will also work on critical thinking skills. The first year will be devoted to developing both research and analysis skills; the second to writing on individually chosen topics. As long as the epidemic persists, we will probably have to work mostly through distance learning.

Application process for this seminar: Please submit a paragraph introducing yourself and why you have chosen this seminar. Please include your email address. Hopefully, with that information, we will not need to do any interviews. However, if there turns out to be a need, then we will arrange a Zoom meeting. However, I think that will almost certainly not be necessary.

「美と美術と美意識を語る」

専門分野

フランス語圏文学・文化(表象文化論)、フランス語教育学、美学

専門分野の概要

私の専門はまずフランス文学です。文学は言葉の研究です。私が興味を持ったのは「グロテスク」という言葉。フランス語の辞書では「異様で滑稽な」「グロテスクな」、英語の辞書では「怪奇な」「異様な」「グロテスクな」とあります。結局、英語でもフランス語でもぴったりの日本語がないため「グロテスク」とそのまま言う。しかし日常であまり使うことはない。西洋では建築装飾の用語として生まれ、日常用語に転じ、さらに美学(恐怖と笑い)となった言葉です。現代はすべてが「グロイ」。その言葉を使わなくても、すべてがニュアンス的に「グロイ」。一つの言葉の概念が様々な領域を横断し、言葉に出さずともそういう環境に身を置いている私たちの世界とはどのような世界なのか。文学、美術、建築、表象文化に大いなる関心をもって研究をしています。

演習内容

2019年の暮れ、それは始まった。Covid-19と名付けられた。2020年、そして2021年も私たちはCovid-19の世界にいる。目に見えないウィルスが世界を変えつつある。直線的に展開してきた感のある歴史は、今や足止めをくらいつつ多様性をもって飛躍的に前進している。目に見えないものを可視化するにはどうしたらよいか。本演習では、欧米の美に対する考え方・生活への取り入れ方と日本の美に対する考え方・取り入れ方の違いを研究する。過激化する世界を癒し、経済・社会の質を高めるためにはスキルを学ぶだけでは不十分だ。私たちの生活力、社会の力、国の競争力がICTなどスキルの獲得で向上したとしても、その生活の「質」、社会の「質」、国の「質」を高めるのはアートへの意識、感性の高さ、つまり人間力ではないか。ヨーロッパのどの空港でもよいから降りてみよう。圧倒的に空気が違う。最初に降りた町は、日本の町とひどく異なるのだ。その違いはどこから来るのか。

本演習では、ヨーロッパの美の理論はカントに学び、日本の美はドナルド・キーンらに学ぶ。実際に芸術作品(絵画)を鑑賞しながらディスカッションする。「モナリザ」「最後の審判」「アテネの学堂」などの作品は、モネやルノワールやピサロなど印象派の作品となぜかくも異なるのか、考えてみたことはあるだろうか。「スキル+」を目標に、各自の感性を言語化してほしい。最終的にゼミ論集(8000字)を完成させる。

参考文献

イマヌエル・カント『美と崇高との感情性に関する観察』岩波文庫 1982

ドナルド・キーン「日本人の美意識」中公文庫 1999

千住博『美は時を超える』光文社新書 2004など

映画・絵画・写真を通して見た食文化

専門分野

フランス語学(言語処理論)、言語学・映画論

専門分野の概要

2012年よりスペイン語・フランス語辞典の編纂に着手。現在は、収集した現代フランス語及びスペイン語を体系的に整理した現代仏西辞典を編纂中。近現代の様々なメディア(新聞、ニュース、ブログ、SNS、映画等)で使用される言葉の意味や、従来の辞書で掲載されていない近年の社会情勢に関連する語彙や、異文化理解のために必要とされる新語や新しい表現に着目し、口語辞典を編纂している。

演習内容

ユネスコ無形文化遺産にも登録されている「フランス人の美食術」。この演習では、フランス含めたヨーロッパ諸国および日本の映画・絵画・写真において食事に関するシーンを題材とし、19世紀から現代まで、時代、階級、年齢などによって、食事内容、習慣、作法がどのように変化しているかについて研究します。題材を観る前に、演習のテーマに関連した基礎知識を解説します。鑑賞後は、各々が感じたことについて意見交換を行い、その場面に登場した人物の具体的な会話や行動をもとに知識を深めます。本演習は、文化芸術に関心がある人、フランス映画の世界観に共感できる人に興味のある学生向けです。

メディアの中の近現代社会を通して、フランスとヨーロッパ文化を研究し、相違点を分析します。具体的には、昼食と夕食、平日と週末の食事、19世紀のフランスとデンマークの食事などを比較し、食生活や作法などが社会階級や異文化、宗教などの様々な要因によって形成されていることを学びます。

題材例「舟遊びをする人々の昼食」(1881年)。ルノワールの食事をテーマにした絵画。1枚の絵画だけでも当時の様々な文化を考察することが出来ます。食事の場が、人間同士の社会的関係を形成する上で重要であり、男女間の仕草等から19世紀末時点で女性の地位が確立し男女間で対等な文化交流が行われていたことが読み取れます。

日本では未公開の映像教材も使用します。大学の図書館に所蔵されている映像作品も、各自の関心に合わせてその都度紹介していきます。

映画や絵画はフィクションの世界ですが、その中でもリアリティーを発見することができます。自分なりの視点や問題意識を持って映画を観ることで、より深い味わいを追求し、見識を広げてほしいと思います。

学びを社会に届けよう

専門分野

日本語教育学(協同学習)、教育工学、協働学習

専門分野の概要

私の研究領域は、教育工学と協働学習です。教育工学では、主に教育分野におけるICT(Information and Communication, Technology)／AI(Artificial Intelligent)の望ましい在り方とはどのようなものかについて検証しています。協働学習では、異なる背景を持った参加者(留学生と日本人学生のケースが多いです)と共通のゴールを目指すPBL(Project Based Learning)型授業において、どのような気づきや学びがあるのかについて実践を通して調査を行っています。

演習内容

この演習のキーワードは、「国際協力、ICT、協働学習、アウトリーチ」の4つです。国際協力の枠組みにおいて自分たちが学んだこと(Input)を協働学習とICTを駆使した伝える作業の準備において深く理解(Intake)し、誰かに伝えること(Output)で社会への還元(Outreach)を目指す授業です。

まず、みなさんには、国際協力という広いくくりの中からクラスで探究したいトピックをひとつ選んでもらいます。選んだトピックの理解を深めるために国際協力の現場で働く方々のレクチャーを聞きます。現時点で、世界保健機関(WHO)、国際協力機構(JICA)、国境なき医師団、三井物産株式会社、ソフトバンク株式会社で働く様々な国籍の方々が協力を申し出てくれています。今後も必要に応じてカウンターパートは増やしていきます。

次に、自分たちの学びを伝える準備をします。ミニ授業という形で、小・中・高の生徒に伝えることを想定しています。ミニ授業の準備段階で、(1)徹底したアカデミック・スキル、(2)リサーチメソッド、(3)コミュニケーションスキルの習得を目指します。加えて、「学び」と「伝える」を支えるためのICT活用についても学んでいきます。具体的には、どんな時にどんなICTを使うべきかのICTリテラシーの育成が主ですが、必要に応じてPythonやRなどのプログラミング言語も扱います。

最後に、ミニ授業をします。他者に伝えるためには自分の理解度を上げなくてはなりません。教室の外に出て、目の前にいる生徒に伝えるという体験を通してアウトリーチ活動を行います。

お気づきの通り、この演習は学生が自分たちで考えて動かなくてはいけない内容となっています。その代わりに、ホンモノに出会い、自分たちでゴールまでをデザインする醍醐味があります。学生時代に何か大きな挑戦をしてみたい！将来は国際機関で働きたい！何か社会に貢献をしたい！そんな学生に参加してもらいたいと考えています。

よこみぞしんいちろう
横溝紳一郎

外国語(日本語・英語・フランス語)教師のすべきこと・できること・やってはいけないことについて考えていこう!

専門分野

日本語教育学(日本語教員養成)、外国語教育学、教師教育学

専門分野の概要

現在の研究対象分野は、(a)教育実習生や現職教師に対して、教師教育者がどのように働きかけるべきか、(b)教師の言動が学習者の学習意欲にどのような影響を与えるのか、(c)高等学校と大学の英語教育の連携はどうあるべきなのか、(d)外国語教育を通じて、21世紀を生き抜くための資質・能力をどのように向上させるのか、等です。どの分野においても、理論・実践の両面から調査研究を進めています。

演習内容

私は西南学院大学の卒業生です。本学在籍中に交換留学生としてサンディエゴ州立大学に留学した時に、「ことばの教師になりたい!」と思い立ち、教える言語として日本語を選択しました。卒業後、ハワイ大学大学院に通いながら、日本語教師のアシスタントやインストラクターを約10年間務め、帰国しました。帰国後は、外国語教師の育成を専門として、教育・研究を続けています。そんな私がずっと考えて続けていること、それが「外国語教師がすべきこと/できること、そしてやってはいけないことって、いったい何なのだろうか」というテーマです。

私は「外国語の先生をめざす学生には全員、この根本的な問いに対する回答を、卒業前に必ず見つけてほしい」と強く願っています。そのためには、外国語教育についての広くて深い知識が必要不可欠ですので、前期と後期に分けて、以下の項目を学んでいきます。

[前期]

①教師の資質・能力、②スピーキングの指導、③リスニングの指導、④ライティングの指導、⑤リーディングの指導、⑥4技能の統合、⑦テスト・評価、⑧自律的学習者を育てる方法、等。

[後期]

①教師の役割、②学習項目の導入方法、③文法説明の方法、④発音の指導、⑤教材・教具の活用方法、⑥学習者の多様性の把握と対応、⑦学習者との信頼関係作り、⑧教師の言動のふり返り、等。

これだけ多くの内容を深く学んでいこうとする授業ですので、授業に参加する学生には、授業時間内はもちろん、事前学習・事後学習という形での積極的な参画が強く求められます。たくさんのエネルギーと時間を注ぎ込むことが必要不可欠ですので、「どうしても外国語の先生になりたい!」という強い意志と覚悟を持った学生向けの授業です。

《 Amour et Argent 》 ——近代フランス文学における「恋愛と金銭」

専門分野

フランス語圏文学・文化(小説)、美学・表象文化

専門分野の概要

もともとは19世紀フランス文学、とくに小説が専門。小説は何の役に立つのか、ずっと考えてきました。小説はたんなる娯楽ではありません。小説は社会を写す鏡という考えが成立した19世紀フランスにおいて、小説は、現代社会とそこに生きる人間についての「研究」でした。そこにあるのは、数式でも理論でもなく、ただの言葉にすぎません。人の意志や欲望の成就や失敗、社会階層の上昇や下降、自分以外の人に向けたり向けられたりする感情や関係のやりとりについての言葉なのですが、それらは、小説のなかで生きられた言葉として書かれています。生きられた言葉には、私たちが「言葉を使って生きる動物」であるかぎり、私たちのなかで共鳴し、強く働きかけてくる力があります。そのような小説の言葉の生態について、私は、必ずしもフランス語に限定しないで研究していきたいと思います。

演習内容

2022年度は、主に二つのことをします。一つは、やさしいフランス語で書かれた、「恋愛と金銭」を主題にしたモーパッサンの短編*La rempailleuse*『椅子直しの女』を読むことです。

馬車を住まいとして町から町へ放浪する椅子直しの貧しい一家の娘が、たまたま、友達からお金を取られて泣いている少年に出会い、かわいそうに思って自分のお金をあげて、キスしても受け入れられたことから愛情を抱き、その町に行くたびごとに、貯めたお金をその男の子に与え続け、自分の気持ちを貫き通そうとする女性の話です。モーパッサンの描いた「純愛」物語とされますが、なぜ少女はお金でしか自分の愛を表現できないのでしょうか。

このテキストを毎回少しずつ読んで、フランス語の語彙力、文法力、読解力、表現力をつけます。もう一つは、テキストについてコメントし、内容理解を深め、さらには、同じ主題の他の作品——フランスでも日本でも他の国でもいいです——を主に翻訳を用いて比較することで、「恋愛と金銭」について知見を広め、自分の頭で考えることです。みなさんに自由に作品を選んでもらい、発表してもらいます。近代社会のなかで、恋愛のなかに金銭が入りこみ、混じり合っていくことの必然性と矛盾、両者の多様な関係の歴史性と現代性について検討します。

発展させる作品としては、フランス文学では、バルザック『ウージェニー・グランデ』(持参金)やデュマ・フィス『椿姫』(お金で買える愛)などが考えられますが、さらに範囲をディケンズ『大いなる遺産』や日本の近代小説に広げることできます。

フランス語で短いながらもお話を最初から最後まで読んでみたい人、フランスに限らず小説を読むこと好きな人、現代日本を含め、恋愛と金銭の関心に興味がある人に向いています。

Translation Practice / 翻訳練習

専門分野

グローバル文学・文化(日本文学・文化)、通訳・翻訳学、世界文学・翻訳学・外国語教育

Global Literature/Culture (Japanese literature/culture) Translation Studies, world literature, Foreign Language Education

専門分野の概要

私の専門分野は日本文学(主に戦後・現代)や、翻訳方法や理論における日本小説の読み方を探検することです。世界文学・翻訳研究では、グローバル時代における国文学(日本文学と日本語文学の違い)に対する考え方の変化を調査しています。文学を通じた異文化コミュニケーションや、様々な形の翻訳が原文を豊かにし、どのように変容していくかの問題に興味を持っています。研究者としての私の長期的な目標は、世界文学とグローバル・スタディーズの枠組みの中で日本文学を再定式化する方法を理解し、日本の研究に新しい研究方法を実際に応用するために、グローバル・スタディーズで日本文学と日本語を探求し続けていきたいと考えています。

演習内容

The outline of the seminar:

This seminar (taught both in Japanese and in English) introduces students to leading theories and approaches in Translation Studies. The objective is to address theoretical issues and methods applicable to various texts and to assess the significance of translation in the context of cross-cultural communication. The course aims at helping students to develop their language skills and critically approach existing translations with the use of adequate materials and references.

Upon the completion of the seminar, students will also become familiar with a range of digital and paper resources, and a Computer-Assisted Translation Tool (CAT).

The seminar is based on lecture-workshop method. Each session introduces students to a different aspect of translation and consists of a short introduction to a theory and method. This is followed by in-class discussion based on assigned reading and translation task.

統語論基礎

専門分野

英語学(統語論)、日英語文法比較

専門分野の概要

専門は統語論です。世界には7000ほどの言語があると言われていますが、人間は子供のころに十分な言語刺激を受ければ、人種に関係なくどの言語でも獲得できます。それは、人間の脳には共通した「言語装置」があるためです。その言語装置の形、つまり、世界の言語に共通する普遍的な文法規則はどのようなものかを解明することが統語論の目標です。具体的には、日英語の文法に共通する規則は何か、また、日英語の(表面的な)文法の違いはどこから導かれるかなどを研究します。例えば、英語では義務的に文頭に(1つの)wh句が移動しますが(例: Who did you meet? / Who bought what?)、日本語では移動しません(例: 花子は誰に会ったの? / 昨日誰が何を買ったの?)。このような言語間の差異をどのように統一的に説明するかという問いなどが研究対象となります。

演習内容

演習 I では、日英語の統語論の基礎を学びます。慣れるまでは、専門用語や、「樹形図」と呼ばれる文構造の表記法などに苦戦するかもしれませんが、ある程度慣れると、日英語の文法をより深く学ぶことができます。例えば、日英語(さらには他の言語)の語順・文法の違い、wh移動の有無、否定文や削除文などでのdoの出現の理由、英語では三人称単数現在形のsがあるのに日本語ではそれに対応するものはないのはなぜか、there構文の文法・意味的特徴(A cat is in the room. と There is a cat in the room. の違いは何かなど)、受け身文の特徴、代名詞が出現する場所の制限(例えば、Himself likes John. や、John thinks that himself is smart. がなぜ文法的でないか)など、文法についてより深く理解したい方におすすめです。

授業では、基本的にプリントを配布し、様々な構文や文法現象を学びながら、その根底にある文法規則(普遍文法)は何かという問いを考えていきます。受講生には、専門的な知識を習得するとともに、「表面的な文法現象の根底にある共通規則はなんだろう」という探求心を持ち、自分なりの仮説を立ててみることを期待します。授業中に理解できない部分があった場合はその場で質問してください。皆さんと一緒に言語・文法の面白さを共有できることを楽しみにしています。

ダイバーシティ社会について考えてみよう

専門分野

社会学(アメリカ社会論・人種とエスニシティ)、比較社会、マイノリティ研究、CLIL

専門分野の概要

もともとは、アメリカ研究という分野の出身ですが社会学をアメリカの大学院で最初から学び直しました。そして、現代アメリカ社会のマイノリティに係る問題を主に研究してきました。具体的には同性婚、フィリピン系移民看護師、ヒスパニック系日雇い労働者、ワーキングセンター（NPO団体）などです。もう一つ取り組んできた研究はCLIL（内容言語統合型学習）です。主に、アメリカ社会に係る英文（水産物管理、食品偽装、魚種のリブランディング事業）を日本語で読む際のポイントの整理、日本の時事問題を英語でどのように表現するかなどを研究する大学間プロジェクトに参加してきました。海洋管理に係る文献を読んできた影響で、最近では「外国からの移住」の対象を「人間」だけでなく「動物」に視野を広げて比較することを試みています。対人インタビュー調査ではなかなか明るみにでない事柄なので、トラデジタル・データ（新聞とソーシャルメディア）を集めて分析しています。

演習内容

この演習Iでは、ダイバーシティ社会（多様性社会）について文献と調査を通して学び、実際にデータを集めて分析した上で、ゼミ論文にまとめる作業を行います。普段、色々な人と接する機会があります。特定の人たちばかりに目が向きがちで（可視化）、指摘されないとなかなか気が付きにくい人たち（不可視化）もいます。日常生活の中で新たな発見ができるような視点を磨くことを目的とした演習です。文献を読むだけでは理解できないこともあるので、自分でテーマ設定をして実際に調査をしていただきます。事例は二つ取り上げてください。比較しないと、何がその集団・社会の特質なのかが（類似点と相違点）わからないからです。あと、必ずエビデンスを探るようにしてください。皆さん、独自の視点をお持ちで感心します。しかし、感想を述べるのではなく論証することを3年生では学んでください。

一年間のスケジュール：

前期は下記の①から③教科書の抜粋を用いて、さまざまなバックグラウンドの人々について学びます。演習ですので、各学生が責任をもって教科書の内容をハンドアウトにまとめて、クラスの中で発表する形式にします。前期の授業で学んだ内容を踏まえて、自分の研究プロジェクトをたてていただきます。夏休みは文献の調査と、どのようにデータを集めるかについて考えてください。後期は④の教科書を使い、実際に調査可能な状態にまで落とし込んだ上でデータを集めます。闇雲にデータを集めると、その後の分析が大変になります。留意すべき点を考えながら調査設計をしてデータを集めます。最終的にはゼミ論文（参考文献を入れて5000字以上）を作成します。

使用教科書：

- ①駒井洋編著『マルチ・エスニック・ジャパニーズ』（明石書店、2016年）
- ②Brunsma, David L. ed., 2006, *Mixed Messages: Multiracial Identities in the "Color-Blind" Era.*, London: Lynne Rienner Publishers.
- ③伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子, 2019, 『女性学・男性学 ジェンダー論入門 第3版』有斐閣.
- ④佐藤郁哉, 2019, 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.

Exploring International Corporate Communication

専門分野

コミュニケーション学(多文化共生)

corporate communication, public relations, intercultural communication

専門分野の概要

My research interests lie in the effects of culture on how companies use communication to achieve their strategic goals: to sell their products or services (marketing and brand management), shape their image (public relations), and manage challenges to their reputation (crisis communication). My current research focuses on (a) cross-cultural differences in organizational crisis communication practice and (b) the effect of spokesperson characteristics, such as nationality and gender, on crisis communication effectiveness.

演習内容

What will we be studying?

We live in a global village where it is becoming easier and easier for companies to expand their activities beyond national borders. Such expansion exposes companies to new challenges when they begin to communicate with members of different cultural backgrounds. Culture has a significant impact on (a) what companies say to achieve their goals, (b) how these messages are delivered and (c) how these messages are interpreted by the audience. Especially in international settings, companies must carefully plan what to say and how to say it. Misunderstandings can happen easily when messages cross cultural borders. This seminar is designed for students who are interested in the effects of culture on how companies communicate with the outside world. We will examine the influence of cultural considerations on a number of topics that shape public perceptions of companies: advertising, brand management, public relations, corporate social responsibility (CSR), corporate social activism, and crisis communication.

What are the key features of the seminar?

Case Study Focus: A case study approach will allow students to further develop their critical thinking skills. Interesting cases will help students learn about the real life impact of cultural differences and the need for cultural sensitivity.

Student Guided Topic Selection: While the initial activities will be chosen by the teacher, students will increasingly take the lead in choosing companies, industries, or cases that are related to their fields of interest and future career plans.

Cooperative Learning: Students will participate in team-based activities and small group discussion.

Independent Research: In the second half of the course, students will choose their own research projects. Students will choose a topic, plan their project, and collect and analyze data.

Academic Writing Practice: Students will conclude their projects by writing a research paper that presents their findings in a logical and persuasive manner.

Who should join this seminar?

The course will be conducted primarily in English and is designed for students with advanced English skills and a keen interest in learning about corporate communication and culture.

アメリカの反知性主義と人種問題

専門分野

英語圏文学・文化(アメリカ文学)、アメリカン・モダニズム／ウィリアム・フォークナー

専門分野の概要

20世紀のアメリカ文学を代表する作家、ウィリアム・フォークナー(1897-1962)の文学作品を研究しています。フォークナーはその生涯の前半の1920年代から30年代にかけて、アメリカン・モダニズムを代表する前衛的な作品を次々と発表しました。そして生涯の後半1940年代からは、アメリカを代表する作家として、人種問題を含めた様々なアメリカの課題を果敢にその作品の中に取り込みました。彼は特に後期の作品で、それぞれに異なるバックグラウンドを持つ多様な人々が、個人間で平等な関係を築こうと苦闘する姿を描き出しています。フォークナーの作品、特に後期作品を読み解くことによって、現在の国際社会における人間同士の関係をより良い方向へ導くヒントが得られるのではないかと思います。研究を続けています。

演習内容

演習の前期では、課題として幾つかの文学作品や映画を取り上げながら、ホフスタッターの『アメリカの反知性主義』などの基本的な文献を読み、日本語で議論をします。夏休み後の後期には西南の留学生別科の学生を受け入れ、英語で別科との合同授業を行い、アメリカにおける反知性主義と人種問題についての認識を深めます。学生は一年間を通して、アメリカの反知性主義と人種問題についての歴史的、文化的背景を学び、同時に、個人間の平等を実現するにはどうしたら良いかを、様々なテキストや文化事象を学ぶことによって考えます。その上で、現在でも生じている様々な問題について、しっかりとした自分の主張に基づいて英語で議論することのできる力をつけることを目標に、各自の課題を探求します。

アメリカは昔から国家の孤立主義、人々の個人主義が強い国です。そして同時に、孤立主義と個人主義のために、どうしてもなく愚かで反知性的な行動を生み出してしまうことがよくある国でもあります(たとえば、アメリカでは数多くの銃乱射事件が起こっているにもかかわらず、銃規制をできないのが良い例ですね)。このような、孤立した国家や人間の陥りがちな反知性的な傾向を批判的に描くことが、昔からアメリカ文学の重要な主題の一つでした。また、同時に、アメリカ文化がもつ活力の源には、様々な文化的背景を持つ人々の間に平等な関係を実現しようとする知的活動があります。このゼミを通じて、自分以外の個人と平等な関係を作り出す知性を身につけ、知的な情報や意見を交わして生まれた個人間の平等な関係が、それぞれ的人格形成に深い影響を与えることを実感してもらえればと思っています。

いちたにともこ 一谷智子

エコクリティシズム—環境危機と文学的想像力

専門分野

英語圏文学・文化(オーストラリア文学・環境批評)

多文化共生・多文化文学、先住民文学、移民・難民文学、環境人文学、核・原爆文学

専門分野の概要

主に二つの視座から英語圏の文学や文化を研究しています。一つ目はオーストラリアやカナダを中心とした「多文化主義社会における人種・民族・ジェンダー・セクシャリティなど多様性の表象」、二つ目はエコクリティシズム(環境批評)と呼ばれる文学研究の方法を通して「人間と環境の関係」です。エコクリティシズムは、人種や階級、ジェンダーのような社会的要素に加えて、自然や人間でないものを考察の対象とすることで、人間中心的世界観に支えられた近代の認識の枠組みや歴史性を相対化してみようとする批評理論です。エコクリティシズムを用いて、グローバルな環境問題(特に原爆・原発を含む核問題)を描く英語圏と日本の文学作品を分析し、国家(地域)横断的な連帯や文化的記憶の形成について研究を進めています。

演習内容

現在、地球環境は「人新世」と呼ばれる地質時代にあると言われています。「人新世」とは、産業革命や大規模農業、植民地主義、グローバル資本主義、戦争・核実験などの「人間の活動が地球規模の環境変化をもたらした時代」という意味です。近年、日本を含め世界各地で大災害が頻発し、気候変動への対策が喫緊の課題となっています。また人間が自然の隅々まで開発の手を広げたことに起因する(新型コロナウイルスのような)感染症の問題も深刻です。天災と人災が不可分となった「人新世」において、人類の持続可能性を左右する問題に直面する私たちは、今一度、人間と自然・環境の相互作用について考え、従来の価値観を変革する岐路に立たされているといえるのかもしれませんが。

本演習は、エコクリティシズムの方法論を学び、英語圏と日本を中心とした文学(芸術)作品を、「環境」をキーワードに読み解くことを目的としています。その始まりの時から、文学と芸術は、物理的環境や動植物などの非人間を描き、人間と環境の相互作用に関心を注いできました。そうした文学に目を向けてみることは、アフターコロナの時代に、私たちはどのような社会を築いてゆくべきなのか、その新しい世界像を想像するためのさまざまなヒントを与えてくれるでしょう。地球温暖化、化学物質や放射性物質による環境汚染、感染症など目に見えない環境問題に向き合おうとするときに、科学の発展や政治的な政策に劣らず重要なのは想像力です。現代的な社会問題を私たちひとりひとりの問題として捉え、自分がどのように社会と関わってゆけるのかを一緒に探ってゆきましょう。さらには、文学的想像力を通して国民国家のレベルでは解決できないグローバル・イシューとしての環境問題への意識や立脚点を問い直し、国や地域を超えた連帯の可能性についてもみなさんと共に考えてみたいと思っています。

使用するテキストと授業展開について:

〈1〉エコクリティシズムの理論を学ぶために、次の文献を精読します。

Lawrence Buell, Ursula K. Heise, and Karen Thornber. "Literature and Environment," *Annual Review of Environment and Resource*, 36, 2011.

この文献を通して、①環境批評の変遷と概念、②ローカルかつグローバルな場所の想像力、③自然科学、④ジェンダー、⑤(ポスト)コロニアリズム、⑥先住性、⑦ノンヒューマン(動物・AI)、⑧災害という視点から環境批評の方法論を学びます。

〈2〉学んだ視点や方法論を用いて、自分が選んだ作品を分析していきます。文学だけでなく映画、ドキュメンタリー、アニメーション、漫画、音楽、絵画、インスタレーションも考察の対象となります。

外国語の学習・習得を科学する

専門分野

英語学(第二言語習得研究、テスト理論)、言語テスト、英語科教育学

専門分野の概要

英語学(第二言語習得研究とテスト理論)と英語科教育学を専門としています。第二言語習得研究では、日本人英語学習者の英語の学習・習得について研究しています。日本人英語学習者が関係節、wh疑問文、tough構文に出会ったとき、どのような点を難しいと感じ、そして、どう克服して、理解・産出ができるようになっていくのか、その過程に興味があります。テスト理論の研究では、標準型外国語テスト(例: TOEIC®、IELTS®)と自作の cloze test やC-test の信頼性と妥当性を検証しています。英語科教育学の研究では、学生たちが、どのような経験を踏まえて教員になることを選択するのか、そしてベテランの先生方の授業を観察し、自分の知識や能力と変換していく過程に関心をもっています。

演習内容

この「演習I」は、外国語学部での2年間の学び(例: 英文法、英語学概論、英語科教育法、英語科指導法)を踏まえて、英語学の研究に興味・関心のある学生、そして将来、外国語教育関係の仕事(英語教員、フランス語教員、その他、教育関係の職業)に興味のある学生に適していると思います。

1年間のスケジュールは次の通りです。4月から5月は、興味・関心のあるトピックについて各自が発表し全員でその内容についてディスカッションをします。この期間に1年間のゼミ活動で自分が何をしたいのか考えてもらいます。そして6月から7月末までに、どのような方法を用いて研究するのか決定します。夏休み期間を利用して、(1) 文献収集法、(2) 論文・報告書の批判的な読み方、(3) 課題の設定方法、実験・調査の計画(対象者の選定と依頼方法、アンケートやテストの構築、手順、分析法の決定)について、個別指導を通して学びます。9月から10月末までに、実験・調査を実施します。そして、11月から12月に実験・調査の結果を分析・報告し、考察の視点と結論の書き方について学びます。年明けの1月には研究報告会を開催し、その後、各自のレポートをまとめて冊子にします。

この演習Iでは統計を利用します。高校時代に数学が苦手だった方もいると思います。でも、心配する必要はありません。研究したい内容が決まり、調査や実験方法が定まれば、自分の利用する統計分析法について自然と理解が深まります。自分の興味・関心のあることを大切に、課題を設定し、実験や調査を計画・実施するという一連の経験は、卒業後も、自律的な学びへの意識やプロジェクトの企画・運営力として役立つことでしょう。

一緒に研究しませんか。みなさんの応募をお待ちしております。

アイルランドとはどのような国か？

専門分野

英語圏文学・文化(20世紀アイルランド小説)、植民地関係史

専門分野の概要

James Joyce (1882-1941)の代表作である『ダブリン市民』(1914)や『ユリシーズ』(1922)を、ナショナリズムや「他者」といった視点からこれまで読み解いてきました。最近では現代のアイルランド人作家についても関心があり、彼らの作品の中で描写される、アイルランド特有の現象(移民、植民地の歴史、宗派対立など)がどのような意味をもつか、日々深掘りしているところです。一方で英国の植民地であったアイルランドとの関連から、植民地の諸相にも目が向き始めました。2022年度後期から1年間台湾に滞在し、日本統治期の台湾におけるアイルランド文学の受容について、当地の独立運動とも関連させながら研究する予定です。

演習内容

英国の左隣にあり、北海道とほぼ同じ面積を有しながら、人口は500万人にも満たないアイルランド。この国は長きにわたって多くの移民を、北米や英国、オーストラリアなどに送り出してきました。J・F・ケネディやビートルズといった有名人だけでなく、ハロウィーンや聖パトリック祭などもこの国に由来しています。そのアイルランドは12世紀以降、約800年にわたって英国の「植民地」とされていました。この地で人口の圧倒的多数を占めたカトリック信徒は差別され、加えて19世紀半ばに起こった「じゃがいも大飢饉」のため祖国を離れる者が数多く発生しました。移民となった彼らは根付いた土地に新たな文化をもたらし、多様性を生み出すなど多くの利点をもたらした反面、一部の国では差別の対象となっていた時期も存在します。

本演習ではこの「移民」というアイルランド史において重要な社会的な現象を、20世紀のアイルランド人作家がどのように描写してきたか考察することを目的とします。アイルランドという極めてローカルな題材を扱いますが、「移民」というテーマは現在グローバルな事象であるともいえるでしょう。ゼミでは小説や演劇作品をもとに、あらゆる角度から討議を加えていくつもりです。

グローバル・フード・スタディーズ

専門分野

社会学（フランス社会論・思想史）、社会思想史

専門分野の概要

社会学の中でも、私は知識社会学という分野を主に専門としています。この分野は、社会の中で知識がどのように生産され、流通するのか、また知識が人々の思考や行動をいかに導くのかといった問題を取り上げます。私は主に、19世紀以降の社会において、精神医学や社会ダーウィニズム、優生学といった知がどのようなかたちで展開し、またどのような価値観を形成してきたのかという問題を考えています。言い換えれば、生物学的・心理学的なもの見方と、社会の捉え方つまり社会観との関係を探求しています。最近は特に、19世紀末から20世紀初頭にかけて労働者の栄養状態を調査した社会衛生学について調べています。広くは、食べることが社会の中でどのように管理されるのかという問題を考えているのですが、これは本演習のテーマとも密接に関連します。

演習内容

皆さんが日頃食べたり飲んだりするものの多くが、実は外国から輸入されていることは、皆さんもご存じでしょう。日本のような食糧自給率の低い国においては特にそうで、豆腐や納豆、醤油のような伝統食でも、材料の大豆は大部分が輸入に頼っています。またコーヒーは、南北回帰線のあいだの高地という地球上の限られた場所でしか生産できませんが、今や世界中で消費されています。コーヒーはアフリカのエチオピアが原産ですが、16世紀にアラビア半島のイエメンでイスラーム教徒に好まれるようになります。その後、イエメンを征服したオスマントルコがコーヒーを広め、17世紀後半にはヨーロッパにもたらされます。日本でよく飲まれるようになったのは20世紀になってからで、最近ではアメリカのシアトル発祥のコーヒー文化が席卷していますね。コーヒーに限らず、今は世界中の食を楽しむことができます。大学のある西新でも、中華料理や韓国料理はもちろん、フランス料理やイタリア料理、インド料理やメキシコ料理、さらにはペルー料理の店まであります。

このように、グローバル化によって現在の食は多様化していますが、他方で逆の現象も生じています。これはあまり気付かれてないことですが、人間の食べる動植物種数は減少し、ごく限られた動植物の種—3種の動物（牛/豚/鶏）と3種の植物（小麦/稲/トウモロコシ）—が世界中で大量生産されています。20世紀後半の「緑の革命」によって、単位面積あたりの収穫量の多い種への転換が行われるなかで、伝統種がもはや植えられないことなく絶滅しました。19世紀にアメリカで育てられていた7100種のリンゴのうち、6800種が絶滅したと言われています。

このように食を歴史と地理のなかで捉え、食を通じて現代社会の問題を考えるのが本演習の狙いです。参加される皆さん自身が、本や新聞・雑誌、インターネット、実体験を通じて、食材や調理法・食事法、食文化をめぐるトピックを調べ、発表するかたちで演習を進めていきます。

コーパスに基づく言語研究

専門分野

フランス語学(コーパス研究)、フランス語教育学、言語学、応用言語学

専門分野の概要

学習者言語の特徴について、主に語彙の観点から研究を行っています。たとえば、英語を話すとき、日本語を母語とする学習者と母語話者では、使用語彙や表現がどのように異なるのでしょうか。よりスピーキングを向上させるためには、どのような語彙や表現を身につければいいのでしょうか。

私の専門はフランス語ですので、フランス語の学習者について、コーパスと呼ばれる規模の大きな言語資料を用いて、フランス語学習者が過剰に使用する語や、反対に全く使用できない語がどのような特徴を持つのか記述を行っています。

最近では、リーディングにも興味があります。単語の一般的な使用頻度が、学習者の語彙知識と関係するのかが、フランス語の文章を読む際、英語の語彙知識がどのように役立つのか、目下研究中です。

演習内容

本ゼミの最終目標は、大規模なコーパスを用いてリサーチを行い、ゼミ論文を書くことです。研究対象とする言語は、フランス語、英語、日本語とします。語彙を出発点として、意味、形態・統語、社会言語的な側面を明らかにしていきます。フランス語や英語を学習する中で、疑問に思うことを研究対象としてください。日本語で何気なく使用している語について、改めてデータを用いて検証するということも可能です。たとえば、「大学生」という語をキーワードとしたとき、どのような形容詞と一緒に使用されることが多いと思いますか。それらの形容詞から、「大学生」の特徴を明らかにすることができるでしょう。

前期は、コーパス言語学の基礎について学びます。文献を読みながらコーパス研究の歴史を概観し、コーパスを用いてどのような研究ができるのかについてのヒントを得ます。研究の背景を学びつつ、同時に自分のリサーチテーマも決定していきます。リサーチの行い方については、順を追って丁寧に説明します。

後期は、各自のリサーチテーマについて研究を進め、論文を執筆していきます。このゼミではSketch Engineというコーパス検索ツールを用いる予定です。このツールには、各言語について、億単位の語彙から構成されているコーパスが収録されています。Sketch Engineを使用することで、収録語彙の頻度情報はもちろんのこと、共起語（キーワードと一緒に用いられる傾向にある単語）の分析、品詞情報分析、類似した語の差異と共通点を簡単に分析することができます。また、キーワードのシソーラス（類義語辞典）の作成も可能です。

外国語学部で学んだことの集大成として、自分で見つけたテーマについて真摯に向き合って研究を行い、論文として形に残してみませんか。

映像芸術を読む

専門分野

英語圏文学・文化(劇文学・上演・映画研究)、シェイクスピア演劇、現代イギリス演劇、現代スコットランド詩、英語圏のアート・ホラー映画

専門分野の概要

英語圏の演劇・詩・映画を研究しています。具体的には、ここ数年、以下の活動を行っています。イギリス演劇については、劇作家トム・ストッパードの推理演劇が絵画芸術から受けた影響や、サラ・ケイン演劇における不可視性の演出を論じました。ケイン演劇に関しては、日本の劇団が上演する際、学芸協力をつとめました。最近では、スコットランド詩人C・A・ダフィの詩集におけるフェミニズム的なメタポエム性や、ユダヤ系のホラー映画監督アリ・アスターの作品に見る美術的モチーフの効果について、論文を書いています。いま興味を持っていることは、コロナ禍以後の「パンデミック・メディア」と演劇の関係、そして、「ポスト・ホラー」と呼ばれる2010年代のホラー映画群の映画史的な位置づけです。

演習内容

みなさんは今まで、「なぜか分からないけど、あの映画のラストがすごく好き」という風に、自分の感想をはっきりと説明できなかったことはありませんか？それは、そのままでひとつの大事な反応なのですが、映像に関する用語や仕掛けを学べば、次のように、より具体的なコメントをできるようになるかもしれません。「私が感激したのは、結末のメディアム・クローズアップです。あのショットで被写界深度がぐっと深まり、壊れていた人間関係が修復されたことを、巧く視覚化していました」。

この演習では、映画や演劇上演の映像を用いて、それをぼんやりと見るのではなく、じっと目を凝らして「読む」訓練を行います。具体的には *Filmmaker's Eye* (2011) という書籍を使って、画面の構図やカメラワークなどが、いかに物語を効果的に伝えているのかを分析します(テキストは類似する書籍に変更される場合があります)。使用予定の作品は、シェイクスピア演劇の上演映像や、SF、アクション、サスペンス、ラブコメ、ホラー、ノワール、CGアニメーションなどです(作品によっては、暴力描写や性描写を含みます)。授業での使用言語は、受講生の希望に沿って、日本語のみ、日英半々、全て英語など、適宜変更します。映像と批評的に関わることの楽しさを感じてもらうこと、そして、それを卒業後の芸術鑑賞に活かしてもらうことが、この演習の目的です。